慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　１回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

2021年 医学部新年祝賀式開催

社中一丸の絆を強めて コロナ禍の克服を誓う

医学部では、毎年新春を迎えて、教職員および三四会員による新年祝賀式を開催しています。今年は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の影響を受け、1月5日（火）に、関係者のみ、マスクを常時着用するなどの感染防止対策を徹底して開催されました。式典の様子は、慶應義塾大学病院2号館11階の大会議室よりZOOMウェビナーにて生配信いたしました。

慶應義塾大学と親交の深い学校法人北里研究所から、小林弘祐理事長を来賓として迎え、冒頭に天谷雅行医学部長が年頭の詞を述べ、長谷山彰塾長、小林弘祐北里研究所理事長、武田純三三四会長、北川病院長、小川郁医学部教授（教職員代表）からそれぞれ賀詞が述べられました。

また、新型コロナウイルス感染が拡大する厳しい状況の中で、医学部・病院において診療、教育、研究に従事している教職員に対して感謝の気持ちが伝えられ、2021年も医学部・病院の教職員、三四会員、そして慶應義塾社中の絆をより一層深めて前進することが述べられました。

新年祝賀式と併せて「坂口光洋記念慶應義塾医学振興基金」に基づく慶應医学賞 ライジング・スター賞授賞式が行われ、慶應義塾大学医学部内科学教室（腎臓・内分泌・代謝）助教 林香君と慶應義塾大学医学部内科学教室（消化器）専任講師 三上 洋平君の2名が受賞されました。

慶應医学賞 ライジング・スター賞受賞者（左から）柚崎通介医学研究奨励事業委員長、天谷雅行医学部長、林香助教、三上洋平専任講師、長谷山彰塾長　撮影：竹松　明季

新年祝賀式の様子

長谷山彰塾長によるご挨拶

第16回 白衣式

決意も新たに、いざ臨床実習へ

去る1月9日、令和2年度白衣式が北里講堂にて執り行われた。今年はCOVID-19の影響で学生と保護者が一堂に会することは叶わず、来賓の先生方と代表の学生を除きオンラインでの参加となった。医学生の臨床実習の門出を祝う白衣式は本塾が2006年に我が国でいち早く取り入れ、今年で16回目を迎える。

式典には天谷雅行医学部長、北川雄光病院長、武田純三三四会長らが列席し、臨床実習を控えた102回生114名に祝辞を送った。

天谷医学部長は、白衣を着ることの意味や、医師としてのプロフェッショナリズムを持つことの重要性などについて語り、102回生の門出を祝福するとともに慶應医学を社会に施す一員としての自覚を促した。

北川病院長は白衣姿で列席し、自身の着ている襟の立った白衣のルーツについて述べた。また、時として白衣は圧迫感や恐怖感を与えることがあるとしたうえで、白衣に袖を通したときに抱いた緊張感と謙虚さを一生持ち続けてほしいと語った。

武田三四会会長は2018年に竣工した新病院棟のコンセプトの一つに医療者の育成が含まれていることを紹介し、医学は座学だけでなく実際の現場で学ぶことが重要であると述べ、102回生を激励した。なお、三四会からは記念品として印鑑付きボールペンが贈呈された。

その後、今までお世話になった先生方からのメッセージビデオ（102回生制作）が放映され、懐かしい顔ぶれに多くの学生が頬を緩めた。

今年は接触の機会を避けるために先生方から学生一人ひとりへの白衣授与は行われず、各々が予め受け取っていた白衣を画面の前で着用した。そして、学年を代表して出席した学生3名が誓いの言葉を唱和した。誓いの言葉とは、有志により組織された白衣式委員会を中心に102回生全員が協力し、数ヶ月をかけて考えられたものである。

最後に、門川俊明医学教育統括センター長が閉会の辞を述べた。学生の教育担当として、COVID-19流行下においても学習環境を維持するために奔走した苦労を語り、昨年6月にオンラインで実施された4年生の定期試験を振り返った。また、臨床実習は信頼関係で成り立っていると述べ、学生と教員の間だけでなく患者さんや他の医療職との信頼関係が欠かせないと語った。

白衣式を終えて、私たち102回生はいよいよ医療者としての第一歩を踏み出す。今回の白衣式が異例ずくめだったように、社会が変動する中で日常生活や実習など様々な場面で私たちにも変化が求められており、ときに窮屈な思いをするかもしれない。しかし、「工夫をすれば以前に近いことができるし、思ってもみなかったようなもっと良いこともできるので、まさに頭の使いどころ」と門川教授が述べたように、全社会の先導者たらんとする塾生として、今だからこそできることがあるはずだ。来たる臨床実習では常に感謝の気持ちを忘れず、たとえ悩み迷うことがあっても初心に帰って誓いの言葉を反芻し、日々研鑽を積んでいきたい。

（4年　山田慶英）

白衣式に臨んだ102回生たち

自ら白衣に袖を通す

102回生 誓いの言葉

私たち１０２回生は、
医のプロフェッショナルたる
自覚を胸に日夜研鑽に努め、
関わる全ての人に
報恩謝徳の念の抱き、
次世代の医療の核と
なることを、
ここに誓います。

シリーズ連載 第4回

COVID-19と共に。海外で働く

South London & Maudsley NHS Foundation Trust（英国・ロンドン）
水野　裕也（精86回）

英国でCOVID-19の初めての患者が確認されてからちょうど一年。全国規模での計3回のロックダウンや国の威信をかけたワクチンの開発と接種推進など、激動の一年だった。英国では人的被害が深刻で、人口約6800万人に対し、感染者数が計400万人以上、死亡者数が12万人以上にのぼる。一方、昨年12月以降ワクチンの普及は進み、2021年2月現在で医療従事者や高齢者などを中心に国民の5人に1人が一回目の接種を終了、感染収束に向けた希望が見え始めている。

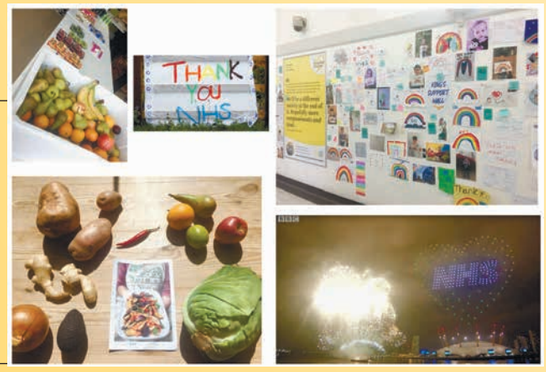
このような状況の中、南ロンドンのモーズレイ病院で精神科医として活動する中で体験したことを紹介したい。

昨年3月、原則対面診療を遠隔診療に切り換えることが国全体で通達され、私が働く統合失調症の専門外来でも、初診を含む大半の診察がビデオ会議や電話で行われるようになった。遠隔診療は、患者と治療者の双方において慣れが必要であったが、思わぬメリットもあった。例えば、ビデオ会議には場所を問わず何名でも参加できるため、複雑な症例では紹介元の医師を含む形で初診を行えた。また、当時私が担当していた難しい患者の診察に指導教授に一緒に入ってもらうことができ、学びの機会が広がった。一方、インターネットや電話回線へのアクセスがない患者も一定数いるため、年齢や経済格差を反映したdigital divideなど課題も明らかとなった。

また、電気けいれん療法（ECT）外来では、スペイン人の精神科医が母国から戻れなくなってしまったため、3月下旬から急遽代役として隔週でECTを担当することになった。いつの間にか固定メンバーとなり、現在も継続している。パンデミックの最中を、予想以上に逞しくしなやかに生きる患者の姿から、勇気をもらうことも多々あった。

ここで感じたことを、今後の臨床や人生において大切にしていきたい。

国民保健サービス（NHS）で働く医療従事者を応援するため、新鮮な野菜や果物、応援メッセージなどが連日病院に届けられた。無観客で行われた年越しイベントでは"Thank you NHS!"のメッセージが夜空を飾った。



2021年度 第5回三四会理事会報告

・日時：2021年１月15日

【審議事項】
・三四会名簿の新しい表紙のデザインを決定。ロシア国旗に類似とのため。名簿不要者への対応について議論。
・連合三田会からの寄付の要請に、三四会会員への広報、三四会として10万円を寄付。
・卒業生への記念品にモバイルバッテリー（ペンマーク入り）。

【報告事項】
・「信濃町物語」を、三四会ホームページで公開。
・第１回赤倉山荘将来検討ＷＧの報告。
施設の老朽化に備えて、時間をかけて方向性を話し合うため。COVID-19による利用者の減少、管理人の高齢化も考慮。赤倉山荘再建時の資料保存について検討。
・慶應赤倉アカデミージュニア：KAA-Jr.
昨年、医看薬の３学部の学生による一貫高校生への説明会を開催。内容が充実しており、３学部長の協力も得られ、期待する声があったので、本年も開催することをお願いした。KAA-Jr.は本年より学生公認団体となり、門川部長の努力により、３学部長の連名で５高校に開催通知を出すことになった。2021年３月20日（土）にオンライン開催予定。
・三四会百年記念品
古梶副会長より、記念品の進捗状況報告。日本酒「玉乃光」、プリザードフラワー、名刺入れ、スクラブ、ネクタイを予定。最終決定次第、医学部新聞等で広報予定。

【懇談事項】
・支部活動について
年１回の支部長会と各支部の集まりが開催されていたが、昨年のCOVID-19の感染拡大により、完全に活動が停止しており、長期となれば、支部活動の消滅につながりかねない。何らかの新しい活動を検討する必要がある。
・三四会展示コーナーの設置
三四会ラウンジに、第１号からの医学部新聞をはじめとした、三四会百年にかかわる品を展示するコーナーの設置を行う予定である。

【会長より】
・COVID-19の感染が終息に向かっていないばかりか、拡大傾向にある中、自らの感染のリスク、病院・医院の収支悪化、教育上の障害などの弊害が出てきている。また、学費の支払いに支障が出てきている学生もいると思われるが、実態把握は困難な状況である。三四会としてどのような形で、会員、医学部・病院、学生への支援を行うか、続けて協議を重ねていきたい。
・赤倉山荘は、焼失後先輩の大変な努力によって、1994年（平成６年）に再建された。しかし、再建後四半世紀が過ぎ、老朽化が問題となり始めている。修理修繕をはじめとする費用に加え、建て替え問題も視野に入れて、赤倉山荘の将来について少しずつ議論を重ねていく必要があると考えている。
・医学部・三四会の情報発信に寄与することを目的に、昨年９月より医学部新聞を医学部学生とその保護者の方に郵送を始めた。一方で、三四会が医学部新聞を発行していると認識されていないとの意見が出された。対策の一環として本号より、理事会報告と会長からのメッセージを載せることとした。

三四会奨励賞の推薦について

Young Investigator Award, Keio University School of Medicine Alumni Association（Sanshikai）

目的　若手の三四会会員の研究を奨励し、実学としての慶應医学の発展を図る。

対象　１．次の各分野ですぐれた業績をあげた三四会正会員で三四会員として少なくとも１年は経過している者（本塾関連病院のみではなく、研究施設、他大学、地域等で業績をあげている三四会員も含む）
対象となる分野
イ、臨床医学　　ロ、基礎医学
２．満40歳以下

推薦方法
１．推薦者は、三四会役員、三四会評議員、慶應義塾大学医学部教授、慶應義塾大学関連病院会会員および他大学教授（三四会員）とします。
２．推薦者は、候補者の承諾を得た上で、所定の書式（三四会奨励賞推薦状）により候補者を推薦して下さい。
３．推薦締切りは2021年４月16日（金）必着、三四会事務局宛とします。
４．提出部数は、推薦状、被推薦者略歴、論文別刷（学術集会発表の場合はそれを証明するコピーと800字程度の抄録）、オリジナル1部とコピー10セットが必要です。
５．対象となる研究が共著論文の場合は共著者の承諾書（オリジナル１部とコピー10部）が必要となります。

※推薦状、略歴、論文、共著者の承諾書を順に組んで１部とし、コピーも同じ体裁に整えてください。
※推薦状のダウンロード、必要書類等は下記URLをご覧下さい。
URL：http://www.sanshikai.jp/award/shourei/index.html

選考ならびに受賞
三四会奨励賞選考委員会による厳正な選考の結果、約８名程度の受賞者を決定します。受賞者は2021年６月12日（土）に予定されている三四会定例評議員会で表彰され、賞状および副賞が授与されます。

三四会社会功労賞の推薦について

目的　地域社会、社会貢献を通じて顕著な功績により三四会の名誉を高めた三四会員を表彰し実学としての慶應医学の発展を図る。

対象　１．表彰目的に沿った優れた業績をあげた三四会正会員（本塾関連病院のみではなく、研究施設、他大学、地域で業績をあげている三四会員も含む）
２．年齢は問わない。

推薦方法
１．推薦者は、三四会役員、三四会評議員、慶應義塾大学医学部教授、慶應義塾大学関連病院会会員および他大学教授（三四会員）とします。
２．推薦者は、候補者の承諾を得た上で、所定の書式（三四会社会功労賞推薦状）により候補者を推薦してください。
３．締め切りは、2021年４月16日（金）必着、三四会事務局宛とします。
４．提出部数は、推薦状、被推薦者略歴、表彰目的に沿った業績目録、客観的に評価しうる資料等、オリジナル1部とコピー10セットが必要です。
５．以前推薦したが、受賞されなかった方の再推薦も可能です。

※推薦書のダウンロード、必要書類等は下記URLをご覧下さい。
URL: http://www.sanshikai.jp/award/kourousyo/index.html

選考ならびに受賞
三四会長を委員長とする三四会社会功労賞選考委員会による厳正な選考の結果、原則１名の受賞者を決定します。受賞者は2021年６月12日（土）に予定されている三四会定例評議員会で表彰され、賞状および副賞が授与されます。

鑑賞知来

ダイアモンドプリンセス号でのCOVID-19による肺炎の蔓延は、45年前に私が遭遇した「在郷軍人病」騒動を想起させた。不整脈研究員としてフィラデルフィアへ留学した1975年7月、到着後1週間ほど滞在したThe Bellevue Stratfordは、米国で最も古く由緒ある荘厳なホテルだった。後から考えると、何となく空調がカビ臭かった記憶がある。

それから1年後、米国全体を震撼させる大事件がそこで勃発した。フィラデルフィアは1776年7月4日に独立宣言の交付された街で、建国200年祭で盛り上がっていた1976年7月、米国在郷軍人の年次総会が、The Bellevue Stratfordで開催された。事件とは、参加者やホテル周辺の通行人に原因不明の重症肺炎が集団発生したことだった。患者が221名、うち29名が死亡した。当初は細菌テロかとの噂が飛び交い騒然となった。最終的にはCDC（Centers for Disease Control）の調査によって、未知のグラム陰性桿菌が発見され、在郷軍人会（American Legion）の名を取って、legionnaires'diseaseと命名された。土壌の常在菌で、ホテルの冷却塔に舞い込んで繁殖し、その冷却塔からの循環水の飛沫が、近くのエアコンの空気取入れ口から吸引され、各部屋のエアコン吹出し口から散布されて、人に暴露したことが分かった。私も1年前の滞在で日本人患者第1号になっていたかもと思うとぞっとした。その後のCDCの調査で、2年前にもそこで同様なoutbreakがあったことが判明した。そのホテルは、この騒動を機にキャンセルが相次ぎ、同年11月に倒産した。

COVID-19感染拡大を契機に、日本版CDC設置が議論されているが、米国CDCは45年前から既に感染対策の主役であった。

（小川聡クリニック　小川　聡　49回）